中　学　校

平成２３年度

教育研究員研究報告書

道　　徳

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅱ　研究の視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅲ　研究の仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

Ⅳ　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

Ⅴ　研究の内容
　1　調査研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　2　授業研究
　（1）実証授業①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
　（2）実証授業②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　（3）授業改善の手だて「①話合いの工夫」・・・・・・・・　17
　（4）授業改善の手だて「②心が通い合う工夫」・・・・・　19

Ⅵ　研究のまとめ
　1　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　21
　2　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　24

研究主題

自尊心を育む道徳の時間の指導の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

「学習意欲が高い」「友人関係が良好である」「遅刻や欠席が少ない」といった生徒がいる一方で「リーダーになりたがらない」「人からの評価を気にしながら行動する」「活動の意欲をもてない」という生徒たちがいる。どの地域の中学校においても、このような生徒たちと出会うことは多い。

また、我が国の青年の「自尊心」は諸外国と比較して低いというデータがある。「第７回世界青年意識調査報告書」（平成 16 年　内閣府　対象 18～24 歳）では、「あなたは、自分自身について誇れるものを持っていますか」との問いに対し、「明るさ」や「やさしさ」「忍耐力、努力家」など全ての項目で、アメリカ合衆国やスウェーデンといった諸外国に比べて低い割合となった。

さらに、東京都教職員研修センターが実施した「自尊感情や自己肯定感に関する意識調査」（平成 20 年）がある。調査結果によると、「自尊心」は小学校から中学校１年生まで次第に低下するが、中学校３年生で上昇し、再び高等学校で低くなる傾向にある。

東京都では「東京都教育ビジョン（第２次）」（平成 20 年）の中で、「人間関係を築く基礎となる力の育成」を重点施策とし、そのための推進計画として「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を掲げている。今、全ての教育活動を通して「自分の存在や価値を積極的に肯定できる子供を育てること」が求められている。

本部会では、自尊心は人の心の中に内在するものであり、「実感しているか否か」の二分法ではなく、「自分への気付き」や「自分の可能性に出会う」ということにより育まれていくものであると考えた。時には教師との関わりや温かく見守る周囲の大人たちの態度も必要であろう。また、そこには「異なる意見を受容する・認め合う」といった他者との関わりや学びも不可欠であると考える。そうして育まれる「自尊心」とは、「『自分』をかけがえのない存在、価値ある存在と捉える気持ち」そのものなのである。

そこで私たちは、「自尊心を育む道徳の時間の指導の工夫」を研究主題として、「自己の向上を図る生徒・互いを認め合える生徒」を育成するために、「自分を見つめること・他者との関わりを見つめること」を視点として、道徳の時間の指導の工夫について研究を進めていくこととした。

Ⅱ　研究の視点

1　研究構想図

東京都教育委員会の教育目標

○互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間
○社会の一員として、社会に貢献しようとする人間
○自ら学び考え行動する、個性と創造力豊かな人間

社会的背景

・価値観の多様化　・人間関係の希薄化　・凶悪犯罪の低年齢化　・国際化社会の進展
・コミュニケーション形態の変化　・豊富な情報と情報モラルの低下　・少子高齢化　など

研究主題

自尊心を育む道徳の時間の指導の工夫

自尊心

「自分」をかけがえのない存在・価値ある存在として捉える気持ち

目指す生徒像

自己の向上を図る生徒・互いを認め合える生徒

研究仮説

道徳の時間において、生徒同士が「互いに認め合う」学習を指導過程に位置付ければ、生徒一人一人の自尊心が育まれるであろう。

手だて

○話合いの工夫

・読み物資料の精選
・効果的な発問
・話合いの形態の工夫

○心が通い合う工夫

・ワークシートの工夫
・学級通信（学年通信道徳通信）の工夫

2　自尊心について

「自尊心」とは、『日本大百科全書』によれば、以下のようになる。

> 一般的には、他人から干渉されず他者から受け入れられ、自分を高く評価しようとする感情ないし態度のことであるが、心理学では self-esteem の訳語として用いられ、自己評価、自己価値、自己尊重、自尊感情などの訳語も使われている。たいていの人は、自分が他者から受け入れられ、また自分の存在を価値あるものとして肯定したい願望を意識的、無意識的にもっている。これが自尊心にほかならないが、その起源は、ほとんどの両親が自分の子供に与える好意的評価のうちにあるとみなされる。子供たちは、こうした価値づけを全面的あるいは部分的に受け入れ、それ以後の経験と評価をそれに一致させようとするわけである。したがって、幼少期に両親が子供に頻繁に否定的な評価を与えれば、子供は自分自身に対するこの見方をのちのちまで受け入れてしまい、自分をだめな人間と決め込んでしまう自尊心の低い者になる場合も生じる。

また、東京都教職員研修センターでは、「自尊感情」について以下のように定義している。

> 「自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在・価値ある存在としてとらえる気持ち」
> 『自信　やる気　確かな自我を育てるために【基礎編】』（平成23年3月　東京都教職員研修センター）

これらのことを受け、私たちはまず「小学校低・中学年から高学年、中学生へと学年が上がるにつれて自尊心が低い子供が増えている理由は何か。」ということについて考えた。話合いの中では、「成長の過程で他者と自分とを比較するようになり自信をなくしてしまう」「思春期の特性として、自分の弱さや短所ばかりに目を向けてしまう」等の考えが出され、さらに、情報があふれすぎる社会や希薄な人間関係、少子化による保護者の過剰な期待等の様々な条件が重なり合っているのではないかと考えた。そして、「自尊心」は、自分と他者の存在という微妙なバランスの上に成り立っているものであるが、自分を他者と比較すべきではないことや、自分に対する他者の評価にむやみに振り回されるものではないことも確認した。

そのことを踏まえ、「自尊心」とは、自分自身を理解し向上させていくとともに、他者を理解し認め合う関わりの中から育まれていくものであろうと考え、「自分を見つめる自分」という観点と、「他者との関わりを見つめる自分」という観点の両面から考えていくことにした。

そして、「生徒の自尊心を高めるためにはどうしたらいいのか」という検討を重ねた結果、道徳の時間の中で互いの思いや考え、意見を述べ合う「話合い」や、授業の中で培ったことを日常的な「心が通い合う活動」へと広げていく等の工夫が大切であろうと考えた。

資料を通して抱く「よりよく生きたい」という思いを他者と認め合う活動の中で更に広げ、生徒一人一人が「自分はかけがえのない存在であり、価値ある存在である」と考える心を育てていきたい。

3　目指す生徒像

自己の向上を図る生徒・互いを認め合える生徒

生徒の人間関係は、中学生ともなると大きな広がりをもってくる。小学生の頃までは強い影響をもっていた親や教師の存在は、相対的に小さくなり、学校や学級の様々な小集団や仲間集団が、生徒にとって大きな影響を与えるようになる。前述の「自尊心について」にもあるように、生徒は、「自分が他者から受け入れられたい」「自分の存在を他者から認められたい」という願望をもっている。「みんなから認められている」「みんなの意見を互いに尊重している」「自分の考えが尊重されている」などに気付かせることも必要である。そこで、「自分を見つめる自分」の観点に加えて「他者との関わりを見つめる自分」の観点からも、自分に自信がもてるような生徒を育成する必要があると考えた。特に道徳の時間では、自己を更に高めようとする態度や互いを認め合おうとする心情を養うことで、自信や自尊心が育まれると考えた。そこで、本部会では、目指す生徒像を「自己の向上を図る生徒・互いを認め合える生徒」とした。

Ⅲ　研究の仮説

道徳の時間において、生徒同士が「互いに認め合う」学習を指導過程に位置付ければ、生徒一人一人の自尊心が育まれるであろう

道徳の時間において、生徒同士が「互いに認め合う」学習（話合いを通して互いの考えを認め自己の考え方を深める学習）を指導過程に位置付ける手だてとして、①話合いの工夫、②心が通い合う工夫の二つを通して検証を行う。

このことによって、本部会の目指す生徒像に近づくと考え、生徒一人一人の自尊心が育まれるであろうと仮定した。

Ⅳ　研究の方法

1　調査研究

生徒一人一人の自尊心の傾向を把握するため、都内公立中学校５校の生徒男子 132 名、女子 126 名を対象に「自尊感情測定尺度（東京都版）自己評価シート」（東京都教職員研修センター）を活用し、6 月と 11 月に実施した。

2　授業研究

研究仮説に基づき、話合いの工夫と心が通い合う工夫の二つの手だてに絞り、実証授業を行った。

Ⅴ　研究の内容

1　調査研究

(1)　調査概要

ア　ねらい

生徒の自尊心の傾向を把握する。本研究により、生徒にどのような変化が生じたか確認する。

イ　調査内容・方法

東京都教職員研修センターの『自信　やる気　確かな自我を育てるために【基礎編】』に掲載されている「自尊感情測定尺度（東京都版）」を活用し、質問紙法により調査を行った。

ウ　調査時期

平成23年6月と11月の2回

エ　調査対象

都内公立中学校5校の生徒男子132名、女子126名を対象に調査を行った。

(2)　調査結果

調査は、22の項目に対して「4：当てはまる」「3：どちらかというと当てはまる」「2：どちらかというと当てはまらない」「1：当てはまらない」の4段階を設定し、回答を集計した。

調査結果から、生徒の「自己評価・自己受容」、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」という三つの観点の高さによって各生徒の自尊心に関わる傾向を把握することができる。東京都教職員研修センターの分析によると、各観点の高さから以下の六つのグループに分けることができるという。

A「自己評価・自己受容」が高い

○もっとよくなりたいという意欲がある。

●自己愛が強く、他者と衝突しやすい。

B「関係の中での自己」が高い

○協調性が高く集団になじみやすい。自分より他者の気持ちを優先し、思いやりの気持ちが強い。

●自分に自信がなく、他者の言動に流されやすい。

C「自己主張・自己決定」が高い

○現状に満足せず、学級のリーダーになろうとする気持ちがある。自分の個性を尊重し、自分のペースを守ることができる。

●わがままや自己中心的な負の側面が出やすい。

D「自己評価・自己受容」が低い

○他者を理解し、相手との接点を見い出して関係を成立させ協調性を重んじている。

●自分の短所が気になり、自信がないため、自己を否定的に見る傾向が強い。

E「関係の中での自己」が低い

○自分の考えをしっかりもっており、好きなこと、得意なことを見つけて打ち込むことが

できる。

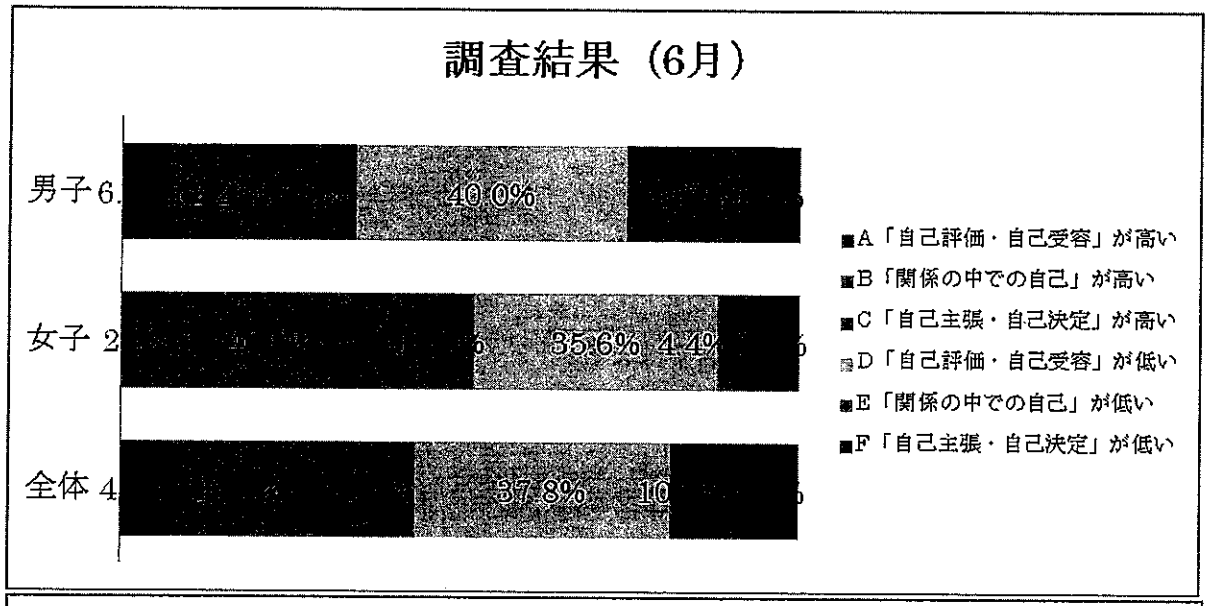
●周りの人への感謝の気持ちや、人のために力を尽くそうとする気持ちが低い。

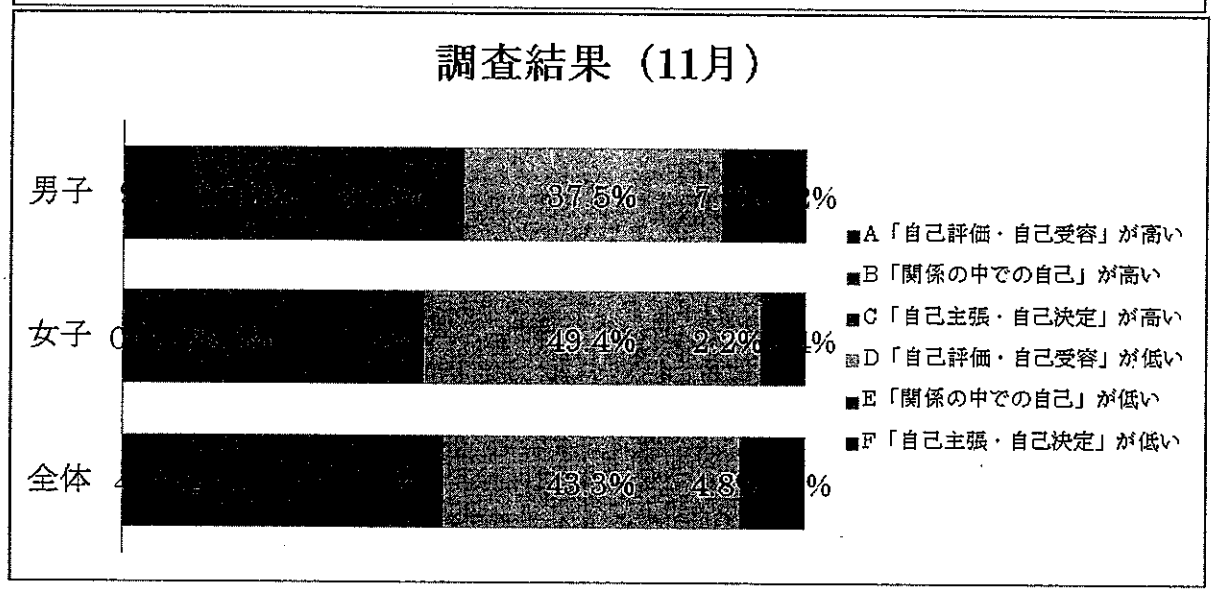
F「自己主張・自己決定」が低い

○穏やかで、友人関係が良好である。集団での活動に協力的である。

●周囲の評価を気にするあまりに、自分を見失ったり、自我を抑えすぎて行動できないことがある。

そこで、今回の調査の結果をまとめると、以下のようになった。





ア　生徒の傾向

6月の調査結果では、D（「自己評価・自己受容」が低い傾向）とB（「関係の中での自己」が高い傾向）の生徒が全体の6割以上を占めていることから、自分の短所が気になり自信がもてないことで、自分自身を否定的に見てしまう生徒が多いこと、また他者の言動に流されやすいという傾向があることも分かった。また、A（「自己評価・自己受容」が高い傾向）の生徒が極端に少ないことからは、「よりよくなりたい」という自己の向上に意欲をもつ生徒が

少ないという現状も分かった。

男女別に見ると、男子はＥ（「関係の中での自己」が低い傾向）の生徒が女子に比べて多いことから、自分の考えをしっかりともっているが、感謝の気持ちや他の人のために力を尽くす気持ちという面では低い傾向にあることが分かった。またＢ（「関係の中での自己」が高い傾向）の生徒について見ると、女子が男子に比べて３倍以上も多いということから、女子は集団に対する意識が高く思いやりの気持ちがあるという一方で、自分に自信がなく他者の言動に流されやすい傾向にあるということが分かった。

そこで、各校の生徒一人一人が自分をかけがえのない存在、価値ある存在として捉える気持ちを高めることができるように、道徳の時間を始めとした各教科の学習の中で生徒同士が「互いに認め合う」学習を指導過程に位置付けることを考え、指導を重ねた。

その結果、11 月の調査結果では、全体的にＣ（「自己主張・自己決定」が高い傾向）とＤ（「自己評価・自己受容」が低い傾向）の生徒がそれぞれ増加し、Ｅ（「関係の中での自己」が低い傾向）の生徒が減ってきた。自分の個性を尊重し自らみんなを引っ張っていこうとする生徒や、協調性を重んじる生徒、そして人のために力を尽くそうとする生徒が増えてきたことが分かる。

男子はＣ（「自己主張・自己決定」が高い傾向）の生徒が大きく増加しており、自分の現状に満足せず、向上させようとする気持ちが高くなってきている。また、Ｂ（「関係の中での自己」が高い傾向）の増加とＥ（「関係の中での自己」が低い傾向）の生徒の減少からは、周りの人への思いやりや感謝の気持ちが少しずつ向上してきたことがうかがえる。

女子は、Ｄ（「自己評価・自己受容」が低い傾向）の生徒が大きく増加しており、他者を理解して協調性を重んじる気持ちが更に高くなってきた。また、Ａ（「自己評価・自己受容」が高い傾向）がいなくなり、Ｃ（「自己主張・自己決定」が高い傾向）の生徒が増加していることから、自己愛ではなく自分の「個性」を尊重できるようになったことが分かる。

イ　生徒の「自尊心」

「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の三つの観点が「全体的に高い・低い」という観点で見ることにより生徒の「自尊心」の様子が分かると考えた。

全体的に高い生徒は、総じて学校生活への適応が良好で、心身共に安定し、学習に対しても意欲的に取り組むことができる。また、自分のことも他人のことも共に大切にすることができる。つまり、私たちの理想とする「自尊心の高い生徒像」に近いと言える。

一方、三つの観点が全体的に低い生徒は、一般的に学校生活や学習面の全般に消極的であると言える。自分の個性を理解したり尊重したりすることができず、自己に対して自信をもつことができず、他者のことも否定的に捉える傾向がある。

6 月の調査の結果、三つの観点が全体的に高い生徒は 12.4％にとどまっていたことから、更に多くの生徒を「自分に自信をもち、他者も大切にできる」という姿に変容させたいと考えた。また、全体的に低い生徒は 13.6％もおり、このような生徒には自分のよさに気付かせることから指導を重ねていこうと考えた。

道徳の授業を中心とした改善の取組によって、各学校の生徒の意識には大きな変容があった。詳しくは、２１ページ以降の「研究のまとめ」に述べた。

2　授業研究

「話合いの工夫」と「心が通い合う工夫」により、生徒が互いに認め合う学習となることを検証するため、二つの実証授業と、各学校における授業改善の実践を行った。

(1)　実証授業①　（平成23年7月4日）

ア　主題名　　充実した生き方の追求　　内容項目１－（５）自己の伸長

イ　資料名　　陶器の町（文教社「中学生の新しい道」２年生）

ウ　資料の概要

主人公は陶器職人の弟子である。親方には、13歳の頃から陶芸の腕をたたきこまれ、一人前の陶器職人として働いている。以前、反発はあったものの、現在、主人公は親方への感謝の気持ちを強くもっている。一方で、自分自身の腕に自信をもち始めたこともあり、大企業である会社へ就職することにも心が大きく動いている。親方への恩と、大会社への挑戦に揺れる主人公の葛藤にポイントを当てることで、充実した生き方について考えさせたい。

エ　ねらい

生きることについての目標をもち、充実した人生に向けてよりよく生きていこうという心情を育てる。

〔資料〕

陶器の町

主人公常吉の住む町は古くから陶器で名高い。常吉も10年近く窯元という陶器を焼く家で働いている腕のいい職人である。常吉の親方は源介といい、昔は腕ききのいい陶芸家であったが、片意地で商才がないために、昔ながらの時代遅れのやりかたで、取り残されてしまっている。その上、新製品の失敗などで借金がかさみ、残されている一つの窯場と小さな仕事場も借金を返済するための抵当になっていた。常吉はこの親方に13歳のときから陶芸の腕をたたきこまれた。親方は、仕事がうまくいかないと常吉を口ぎたなくののしったり、なぐりつけたりした。常吉はそのたびに逃げ出そうと考えたが、技術を身につけるために、じっとしんぼうした。源介親方の口ぐせである「陶は心だ」という言葉が、常吉の心をとらえて、はなさなかったのもある。

ある晩、窯元組合の集会があった。源介親方の代わりに、常吉が代理で出席することになった。その夜会場となった山惣産業で、その規模の大きさに目を見張った。社長の山崎惣一は、以前は名もない一陶芸職人であったが、この数年の間に会社を大きく発展させた。帰りがけに山崎氏は常吉に声をかけた。「常吉さん、わしのところにこんかね。あんたみたいな腕のいい職人がほしいのだ。給料もあんたが今もらっている倍は出せると思うのだが…」「よく考えてみます」やっとこれだけ言って外へ飛び出した常吉は、夜道を歩きながら、自分の人生を踏み外すまいと懸命に考えるのだった。「どうしたらよいのだろう。」常吉が、山崎氏のさそいをうれしいと思いながらもためらいを感じているのは、源介親方に育てられた十年間は、苦しいことやつらいことの連続であった。それだけに、意地も根性もきたられて今の自分があるのだと考えると、ふってわいたようなうまい話に飛びついていくことは人の道に反するのではないか。そして何よりも自分を生かすことになるのだろうかと迷うばかりある。

常吉は、月光をあびている源介親方の窯場の前に立ちつくして、そのみすぼらしい影を見つめて唇をかんだ。「ただいま帰りました。」源介親方は起きていた。じろりと常吉のほうを見たが無言であった。常吉もそれきりだまっていた。「どうだった？」「たいした話し合いはなかったよ。」「そうじゃない、山惣は何か言わなかったか。」やっぱり源介親方は知っていたんだ。だから今夜の集会におれを出したんだ。常吉はそう察すると叫ぶように言った。「親方、なぜおれをここから追い出そうとするんだ。おれはここで育って、この道を行こうと心に決めている。そのためにはここでしかおれを生かす場所はないんだ。それで死ねたら幸せだ。追い出さないでくれ。」常吉は親方の胸にしがみついた。そして泣いた。源介親方も泣いた。

完全引用『中学生の新しい道』（文教社）※日刊企画より掲載の許諾をいただいています。

オ　指導過程

	○学習活動と主な発問	・予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	○陶器製作にかかる苦労と、作には高い技術を要することについて理解する。	・陶芸は高度の技術を要すものなんだ。	・陶器の実物の作品を提示する。
展開	○資料を読み主人公常吉の気持ちについて考える。 発問１ 「常吉は、なぜ条件のよい仕事の誘いをためらったのだろう。」 発問２ 「常吉は、夜道を歩きながらどんなことを考えたのだろう。」 発問３（中心発問） 「常吉は親方の後を継ぐことと大会社に就職することのどちらの進路を選ぶだろう。」 ○ワークシート(1)に記入する。 ○生活班による話合いをする。 ○代表者が発表する。	・源介親方を裏切ることになるから。 ・１０年間育てられた恩義を感じているから。 ・急な誘いで戸惑ったから。 ・今の自分を育ててくれたのは親方だ。 ・自分を生かすためには、山惣に行くべきか。 ***親方の後を継ぐ*** ・親方がかわいそう。 ・陶器の修行を引き続きした方がよい。 ***大会社に就職する*** ・お金を得られ安定した生活を送れる。 ・新しいことに挑戦できる。 ・親方は就職した方がよいと言っている。	・教師が範読する。 ［補助発問］ 「源介親方はなぜ涙を流したのだろう。」 「常吉はなぜ涙を流したのだろう。」 **★「互いに認め合う」学習**
	※自分を振り返る 「あなたにとって充実した人生とはどういったことだろう。また、そのために、どんな考えが必要なのかをまとめよう。」 ○ワークシート(2)に記入する。	・生活の安定ではなく自分の望むことをやるべき。 ・自分が思うことをしようとすることは、すごく覚悟のいることだ。	・自分にとって充実した人生とはどんな生き方か、そしてそのために必要なことはどんなことなのかを考えさせる。
終末	○教師の説話を聞く。		

カ　評価の観点

・常吉の立場に立って、充実した生き方について考えることができたか。

・自分を振り返り、充実した生き方を追求しようとする心情が育ったか。

キ　授業記録（中心発問の話合いの場面）

教　師	生　徒
発問３（中心発問） 「常吉は親方の後を継ぐことと大会社に就職することのどちらの進路を選ぶだろう。」 〔班ごとに1枚ホワイトボードを配布する。〕 生活班（６人ずつ）による話合い	班での話合い（３班） S1　給料がもらえるし、今よりもいい生活ができるので、山惣に行けばいいと思う。 S2　親方の仕事を継いで職人になっても生活は不安定だと思うから、S1 さんに賛成だ。 S3　それに、常吉が自分の夢を実現するためには親方についていてはだめだと思う。
３班に対する補助発問 「源介親方はなぜ涙を流したのだろう。親方の気持ちも一緒に考えてみよう。」 生徒の考えを広げる声かけ	S4　親方は 10 年間も育てた常吉に、本当は出て行ってもらいたくないのだと思う。 S2　常吉に跡を継いでほしいかもしれないけれど、常吉のためを思って、山惣へ行かせたのだろう。 S5　親方は常吉に充実した人生を送って欲しいから厳しくしたのだと思う。 S6 一人前の職人になることは常吉の夢だし、それが親方への恩返しにもなるんじゃないか。

・この後の班ごとの発表で、３班は「班の中でも意見が分かれて迷っていますが、私たちの班では、大会社へ就職することを選ぶという意見が多かったです。なぜなら、常吉は大会社に就職することで立派な陶芸職人になるという自分の夢をかなえることができて、それが親方に育ててもらったことへの恩返しになると思うからです。」と発表した。

・自分を振り返る場面の発問「あなたにとって充実した人生とはどういったことだろう。また、そのために、どんな考えが必要なのかをまとめよう。」では、よりよく生きることについて自分自身の中に判断基準をもった多様な考え方が出された。ワークシートに書かれたそれらの意見は、授業後に発行した学級通信に掲載した。

中学校　２年Ｄ組　学級通信　　平成２３年７月１１日発行

轍　第８０号

陶器の町③ ～充実した人生の追及～

“充実した人生の追及”がテーマである『陶器の町』を資料に、みんなから、様々な意見をもらった。先生自身はこの資料を読んでいて、常吉が充実した人生を送るために「大会社に就職する」ことも「親方の後を継ぐ」ことも、どちらも正解だと思っている。大事なことは、それを選択した理由が、“自分自身の中の判断基準をもって考えているかどうか”だと思う。そう考えながら道徳の時間にみんなの意見を聞くと、よく考えているなと感じ、さらにそれを周りのみんなに伝えようとする一生懸命な姿が素晴らしかった。

先生の意見も言わせてもらうと（決してこれが正しい答えではない）、常吉は「親方の後を継ぐ」ことがいいと思う。それは、常吉の迷い、最後の涙する場面、そして親方も涙した場面から、常吉は厳しい状況に直面しても、それを乗り越えられる力があると思うからだ。

中学2年生、充実した人生、つまり将来のこと、進路のことを少しずつ考えることは、大切なことだ。クラスの仲間の意見もぜひ、読んでみてほしい。何かに迷ったときに、“判断基準”となるものを、自分の中につくっていこう。

給料が多くお金のことに困らなかったり、自分自身が楽しいなと思えるところに行けたりすることが充実した人生だと思える。

仕事以外に何か楽しめるものをつくった方がいいと思う。仕事は楽しい方がいいけど、もし楽しくなかったとしても仕事以外で楽しめる、一生続けられることをつくれば充実してくると思う。

お金も大切だと思うけど、自分は毎日笑顔で楽しく暮らせたらいいと思った。いつもくら～い感じでいると、もちろん自分のテンションも下がってしまうし、周りの空気、人までもテンションが下がってしまうと思うから。そのために私は、毎日休み時間になるたび、友達に話しかけなるべく笑顔をつくるようにしている。一人が笑えば、周りの人も笑顔になると思うから、毎日笑顔でいるようにしたい。

充実した人生とはお金に困ることなく、自分の力を発揮できる場所があることだと思った。日頃から充実した人生を送れるようにがんばっていかなきゃいけないと思った。

仕事は大変でもたくさんお金をもらえて趣味を楽しめる人生

充実した人生とは暮らしが安定しているのもそうだが、自分のもっている力を伸ばしていくことが充実した人生だと思う。

ク　授業の考察

(ア)　話合いの工夫について

班での活発な話合いを行わせることをねらい、登場人物がよりよく生きることのために思い悩み、よりよく生きることについて葛藤する場面のある資料を選択した。生徒は自己の生き方と向き合い、進路選択で揺れる主人公の気持ちを真剣に考えることができた。

中心発問は、主人公が進路選択をどのように決断するかの二者択一の発問を行った。二者択一で、更にその理由を考えさせることにより、様々な意見を引き出すことができ、話合いは活発に行われた。「親方の後を継ぐ」では、「自分のやりたいことができるのは親方の下で仕事をすることだから。」「親方への感謝の気持ちを表すこともできる。」という意見が出された。また、「大会社へ就職する」では、「大会社の方が新しい技術を得ることで更に自分自身が成長できる。」という意見が挙がった。どちらの意見も、ねらいとする道徳的価値に迫るものであった。また、理由が簡潔になりがちな生徒の意見を予想し、その意見を深めさせる補助発問を用いた。授業記録にあるように、３班では「大会社へ行く」という方向に流されてしまいそうな場面で、親方の心情も考えてみるという補助発問をしたことで生徒の考えは広がり、班での話合いが深められた。

また発問構成も工夫し、常吉が葛藤する二つのことの理由となる心情を発問１、２で十分に考えさせた。話合いを行う前のこれらの発問により、話合いはより深まったと考える。しかし、「大会社へ就職して出世してから、親方のところへ戻ればいい。」といった方法論となる意見を述べ、ねらいとする道徳的価値について考えることができない生徒も出てきてしまったことから、発問の言葉を更に吟味する必要を感じた。

話合いの形態は、日常の学校生活でつくる生活班である６人一組であった。本資料は、自己の生き方について異なる様々な意見が出てくる資料であったため、６人組での話合いでは様々な価値観に触れることができ、「人の意見を聞いて新たな発見があった」と感想を述べる生徒もいた。また、生活班で編成されていることから、普段からリーダシップをとっている班長を司会に指名することで話合いがスムーズに行われ、どの班も活発に意見交換をすることができた。

話合いのためには、各班に配ったホワイトボードも有効に活用された。生徒が互いに認め合う学習のためには、更に積極的に話合いを行うための手立てを工夫していきたい。

(イ)　心が通い合う工夫について

生徒の自尊心を育むためには、生徒同士の認め合いに加えて、教師、保護者など様々な人との関わりをもたせることが大切であると考えた。そこで、道徳の時間の内容とその時の生徒の様子を保護者や校内の教職員に伝えるために「学級通信」を活用した。

学級活動の時間に配布することにより、生徒は級友の意見を真剣に読み、多様な価値観をもつ級友がいることに気付くことができた。授業の中での話合いに加え、通信に掲載された意見を通して、生徒同士が心を通い合わせることができる。

さらに、授業中の説話では伝えきれなかった教師の願いや思いを掲載するなど、通信を通しては教師との心の通い合いも期待できる。

(2)　実証授業②　（平成23年10月3日）

ア　主題名　　友達としてのあり方　　内容項目２－（３）友情・信頼

イ　資料名　　甲子園でプレーがしたい（正進社「道しるべ」２年生）

ウ　資料の概要

リトルリーグ（少年野球）、中学校と野球で活躍してきた主人公でキャッチャーの「雄一」とピッチャーの「義男」。中学校３年生の二人は、地元のＳ高校に進学し「Ｓ校で一緒に甲子園へ行くこと」を誓い合い、共に夢見ていた。地元の期待も高まる中、雄一のもとに甲子園常連校であるＣ県のＲ高校に来て欲しいという話がもち上がる。自分の力が認められたことを素直に喜ぶ雄一だが、この誘いが義男と共にではなく「自分にだけの話である」と聞かされ、心が大きく揺れ動く。高校野球という身近な題材を使い、生涯続く友情や信頼関係にについて考えさせたい。

エ　ねらいとする価値について

中学生にとって、友達の存在は大きな意味をもつ。一緒にいて「楽しい」という関係だけではなく、時には競い合い、互いに切磋琢磨（せっさたくま）する友情も必要であり、そうした友情からは、互いを尊敬する気持ちも生まれてくる。

表面的な仲のよさだけではなく、互いを認め合い、高め合える友情はかけがえのないものであり、そんな「友情」について考えることが重要であると考えた。

人生の節目には必ず、互いに励まし合い、競い合う仲間（ライバル）がいる。ライバルとは、ただ実力が伯仲しているだけではなく、互いに「認め・認め合える」間柄を指す。時にその存在は疎ましいが、振り返ると、自分に「自信と勇気」を与えてくれ、確実に成長させてくれる存在ともなる。互いに努力を重ね、苦しいときには支えともなる「ライバル」は、スポーツだけでなく、あらゆる分野で、人間の成長を促してくれるものである。

自尊心が育まれていくためには、「子どもが友達や大人たちの中でかけがえのない一人の人間として大切にされ、頼りにされていることを実感できる」ことが大切である。生徒は「他者、社会、自然・環境との豊かな関わりの中で生きるという実感や達成感を深めてこそ健全な自信がはぐくまれる」のである（中学校学習指導要領解説道徳編 p. 4 から）。

自尊心とは、こうした他者との関係から自分への信頼感を膨らませていく過程で育まれていくものであると考え、本時の授業を行った。

〔資料〕

甲子園でプレーがしたい

「カーン」

「打った。ホームラン。サヨナラホームランです。延長12回の裏、H高校のさよならの勝ちです。今年の夏の全国高校野球は、3対2でH高校の優勝と決まりました。」

「すごいな、雄一。サヨナラホームランだぜ。」

「うん。甲子園に出られるだけでもすごいのに。決勝戦でサヨナラ勝ちだなんて。」

甲子園で行われている夏の全国高校野球大会の決勝戦をテレビで見終わった雄一と義男は、興奮した様子で話した。

「さあ、そろそろ後輩の練習を見に行こうか。」

「そうだな。ぼくたちも練習しなくちゃいけないしな。」

二人は、小学校の時から同じリトルリーグ（少年野球）のチームで活躍し、そのころから甲子園へ行って一緒にプレーすることを夢見ていた。中学校へ入っても野球部に入った二人は、ピッチャーの義男とキャッチャーの雄一でバッテリーを組んでいた。七月の県大会では、義男のピッチングと雄一のバッティングで勝ち進んだが、惜しくも決勝戦で敗れた。その後三年生の二人は部活動を退いたが、二人は勉強の合間をぬって、後輩の指導と、自分たちのトレーニングもかねて、野球部の練習に参加していたのである。

いつごろからであろうか、二人は地元のS高校へ入り、バッテリーを組んで甲子園へ行こうと誓い合っていた。S高校は過去に何度か甲子園へ出場したことがあるが、ここ何年かの間は惜しいところで甲子園に出場できていなかった。しかし、リトルリーグ、中学校と活躍してきた雄一と義男のバッテリーがいることで、二人がS高校へ入れば甲子園へ行けると、地元の人びとも期待をよせていたのである。

現に今年の県の中学校野球大会でも、勝ち進むにつれて父母はもちろん、地元の商店街の人々も応援にかけつけるほどの熱の入れようであった。こんな声援にこたえようと、二人のS高校への夢、そして甲子園への夢は、ますます高まっていったのである。

ある日の夜、雄一の家に、以前に雄一と義男を指導してくれたリトルリーグの監督が訪れた。

「雄一君。もう進学先は決めているのかい。」

「ええ。義男と一緒にS高校へ行って甲子園を目指すんです。地元のみなさんも応援してくれていることですから。」

「そうか。実は雄一君。C県のR高校から君に来てもらいたいという話があったんだ。」

「えっ、あの毎年甲子園に出ているR高校ですか。」

「先日の県の大会で君のバッティングを見ていた私の知人のR高校の人が、ぜひ君にC県へ来て野球をしてほしいというんだ。」

「本当ですか。」

雄一は、R高校で甲子園を目指して野球ができるということはもちろんだが、それ以上に、自分の力が認められたことがうれしかった。

「ここの県では野球の名門校が多くて、毎年のように甲子園に行く学校が変わるけど、C県ではR高校以外に有力な高校がないんだ。それに第一、C県では、高校の数がこの県の半分以下なんだ。絶対甲子園へ行けるぞ。どうだい、雄一君。R高校へ行ってくれないかね。」

「いい話じゃないか、雄一。お前の小さいころからの夢だった甲子園がまた一歩近づいたじゃないか。それに一人で自分の力を試せるチャンスなんだぞ。」

父のこの言葉を聞いて、雄一はずっといっしょに夢を追いかけてきた義男のことを思い出した。

「義男もいっしょに行けるんですか。」

「いや。君だけに来てほしいというんだ。」

「それは、甲子園へは行きたいけど……。」

雄一は、義男との誓いと、甲子園への夢のはざまで、どうすればいいのか困ってしまいました。雄一は、どうすべきでしょう。

完全引用　『道しるべ2』（正進社）※掲載の許諾をいただいています。

エ　ねらい

友情について深く考え、互いを補い高め合う友達とのつながりを大切にしていこうとする心情を育てる。

オ　指導過程

	○学習活動と主な発問	・予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	○資料についてイメージをもつ。 「甲子園と聞くと、どんなことを考えますか。」	・春と秋に高校野球を行う。 ・兵庫県にある。 ・阪神の本拠地	・甲子園球場のイメージをもたせるため、電子黒板で写真を提示する。 ・高校球児のあこがれの場所であることに気付かせる。
展開	○資料を基に主人公の気持ちについて考える。 発問１ 「二人は野球部を引退しても、どうして毎日練習に参加していたのだろう。」 発問２ 「Ｒ高校へ来て欲しいという話を聞いた時、雄一はどんな気持ちだったのだろう。」 ○ワークシート１に記入する。 ○隣同士で意見交換をする。 発問３（中心発問） 「『義男もいっしょに行けるんですか』と聞いた時、雄一はどんな気持ちだっただろう。」 ○生活班の形にして、話し合う。 ○ワークシート２に記入する。 ○代表者は発表する。	・好きな野球を続けていたいから。 ・二人で甲子園へ行きたいから。 ・うれしい。 ・自分でいいのか。 ・義男との約束はどうするか。 ・「二人で甲子園へ行こう」と誓い合っていたからどうしよう。 ・二人で野球がしたい。 ・これでは二人の友情がこわれてしまう。 ・地元商店街の方々の思いも裏切ってしまう。 ・夢を諦めたくないが、友情も大事だ。	・教師が範読する。 ・登場人物について確認する。 ・二人の野球に対する取組とその思いについて想起させる。 ★「互いに認め合う」学習１ ・考えを膨らませるために意見交換を行う。 ・「甲子園への夢」と「友情」がどちらも大切なものであることで葛藤する雄一の心情を考えさせる。 ★「互いに認め合う」学習２ ・二人は互いにその実力を認め合う間柄であることを押さえる。
終末	○教師の説話を聞く。	・これからも友情を大切にしたい。	

カ　評価の観点

・主人公の雄一の心の揺れを通じて、真の友情について考えられたか。
・自らの成長に欠かせない「友だち」の大切さに気付かせることができたか。

キ　授業記録

教　　師	生　徒
導入の発問 「甲子園と言ったら何を思い出すだろう。」	・阪神タイガース　・兵庫県 ・高校野球　・甲子園球場　・土を持ち帰る。
発問１ 「二人は野球部を引退しても、どうして毎日練習に参加していたのだろう。」	・後輩の指導を兼ねて。 ・トレーニングを兼ねて　・野球が好きだから。 ・二人とも甲子園を目指していたから。 ・二人で甲子園に行くことを目指していたから。 ・甲子園が夢だから。・体力を落としたくないから。
生徒の意見を広げる声かけ 補助発問 「なぜ引退してからもトレーニングをしていたのだろう。」	
発問２ 「Ｒ高校へ来て欲しいと言われた時の雄一はどのような気持ちだったのだろう。」 隣の人と意見交換	・うれしい。　・ぼく一人だけですか。 ・自分の力を認められたことはうれしい。 ・なぜぼくが選ばれたのだろう。 ・ぼくの力で通用するのか不安だ。
発問３（中心発問） 「『義男も一緒に行けるんですか』と聞いたときの雄一はどのような気持ちだっただろう。」 班での意見交換	班での意見交換（５班） S1　複雑な気持ちだったと思う。 S2　夢を諦めなければいけない気持ちだったと思う。 S3　Ｒ高校を断ることは夢を諦めることになるのかな。 S4　分からないな。そこに行っても甲子園には行けないかもしれないよ。 S5　ぼくだったらＲ高校を選ぶかもしれない。 ・一緒に行けないならR高校へは行きたくない。 ・義男との友情がこわれてしまうかも知れないという不安な気持ちだった。 ・一緒に甲子園に行くのが二人の夢だった。 ・親友の義男と一緒にS高校へ行きたい。 ・甲子園に行けるＲ高校へ行きたい。

ク　授業の考察

(ア)　話合いの工夫について

「生徒が興味をもち、活発に話合いを行う資料を見つけたい」という思いで、様々な読み物資料に当たったが、学級の生徒の実態から、高校野球という身近に感じられる題材の資料を選択した。さらに、野球になじみのない生徒のために甲子園の写真を用意したり、登場人物の心情が伝わるように資料の範読練習を繰り返したりした。その結果、授業後の生徒の感想にも、「身近なことで考えやすかった。自分はまだ、そんな仲間とか高校とかはないけれど、やっぱり自分がこの立場なら絶対迷う。決められなくなると思う。」とあり、資料選定の意図は成功した。

また、中心発問「『義男もいっしょに行けるんですか』と聞いた時、雄一はどんな気持ちだったのだろう。」の場面で話合いを行わせたいと考え、自分の夢の実現と友情との狭間(はざま)で悩む主人公雄一の心情を追う発問構成とした。

一人一人が自分の考えをワークシートに記入してから、机を動かして話合いを行わせたことで、全員が自分の考えを確実に伝え、その考えをベースにして人の考え方を聞くことができた。甲子園に行きたいという自己の夢の実現と、小学校の時から続く大切な友情との間で葛藤する主人公雄一の心情をそれぞれの班で真剣に話し合っていた。「この話を聞いた時、義男は雄一にどんな言葉をかけるだろう。」等の補助発問も用意していたが、「R高校を断ることは夢を諦めることになるのかな？」と、生徒同士で話題を広げる姿もあり、生徒は雄一と義男の心情に自らの経験や思いを重ねていた。

二人で意見を交流した後、生活班の６人での話合いに移行したが、生活班では話合いの活発さに差もあった。そこで、話し合う人数を変えたり、異なる考えをもつ生徒同士を組み合わせたりする等、更に形態を工夫する必要があったと考える。

(イ)　心が通い合う工夫について

毎時間、ワークシートの最後に「授業を通して考えたこと」を書く時間を設けている。登場人物の心情から離れて、少し客観的に見ることで多様な考えが出される。これは学級通信に掲載した意見であるが、後半部分に本生徒の心情がよく表れていると思う。

> きっと義男はがっかりするけど『R高校に行ってこい!!』と言うと思う。二人とも小さい時から夢をもっていて仲も良いことだろう。それで義男が雄一のことを思っていれば、“必ず”そう言うと思った。この話の後、雄一は、どうしたのかを知りたい。
>
> もしも自分が雄一の立場だったら、簡単には義男とは離れたくないと思う。なぜなら、ずっと一緒に夢を追いかけてきた…友達だから。

これらの感想に対してコメントを付けて返したり、学級通信に掲載して広く学級全体に広げたりすることにより、「友達だからこそ『行って来い』と私も言うと思う。」「ずっと夢を追いかけてきたから、お互いの気持ちはやっぱり通じ合っているんじゃないか。」など、授業の後にも話題は広がっていった。

生徒同士の心を通い合わせることはたやすいことではないが、日々の小さな積み重ねにより、少しずつ変容していくことを実感した。

(3)　授業改善の手だて「①話合いの工夫」

ア　読み物資料の精選

「道徳の時間において、生徒同士が『互いに認め合う』学習を指導過程に位置付ければ、生徒一人一人の自尊心が育まれるであろう」という研究仮説に基づき、いくつかの手だてを考慮しながら、授業改善に取り組んできた。「互いに認め合う」ということは、話合いの中でみんなから認められたり、みんなの意見を互いに尊重し合えたり、自分の意見や考え方が尊重されたりすることによってより高められる。話合いを活発にするということは、「互いに認め合う」ことにつながり、自尊心が育まれていくと考えた。道徳の時間の中で話合いを活発にするための手だてとして、まず、資料の精選が重要であると考えた。

○資料選択の視点

- 生徒の感性に訴え、感動を覚えるようなもの
- 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられるもの
- 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができるもの
- 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの
- 悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの
- 多様で発展的な学習活動を可能にするもの　　（中学校学習指導要領解説道徳編 p.98, 99）

以上の視点を踏まえ、道徳的価値を自覚し、深められる読み物資料を探した。生徒の実態を考慮していく中で、葛藤場面のある資料や主人公の様々な経験を追体験していくことができる資料は生徒の多様な考え方や感じ方等の意見が出やすいことが分かった。また、藤場面のある資料には、「同じ道徳的価値で葛藤するもの」と「異なる道徳的価値で葛藤するもの」との、二つの種類があることも分かった。

各学校で実践した資料の中で、以下に示すものでは特に話合いが活発になり、自尊心を育むことができた。

○各校の実践授業で用いられた資料

内容項目	資料名	資料について	出版社
1－(5) 個性の伸長	木箱の中の鉛筆たち	挫折を味わうが、可能性を信じ努力することの大切さを実感できる資料である。筆者の心に変化が起こる場面があり、中心発問では様々な意見が出た。	廣済堂あかつき１年生
1－(5) 個性の伸長	虎	常に脇役しか与えられない主人公八輔の心の変化を通して自己の向上を図る。葛藤場面があり、虎の役目を受けた時の主人公の気持ちでは多様な意見が出てきた。また、筆者の心に変化が起きる場面もあり、中心発問はねらいに沿った意見が出てきやすい。	廣済堂あかつき２年生

1－(5) 自己の向上 個性の伸長	大会を前にして	大会を前にした女子生徒の葛藤を描いた資料である。運動部に入っている生徒はもちろん、入っていなくても努力の過程に大いに共感することができた。また、祖母との心のきずなも具体的に描かれている。	正進社 1年生
1－(3) 自律、責任	裏庭でのできごと	自らの規範意識について考えさせる資料である。昼休みのできごとで生徒は実際の行動として親しみやすく、葛藤する場面では多様な意見が出た。	学習研究社 1年生
2－(5) 個性の尊重 謙虚、広い心	自分らしさ	「自分らしさ」とは、「他人らしさ」とは何かと考えさせる資料である。人それぞれの個性や立場を尊重し、他人からも多くのことを学びながら、自らの個性の発見と向上に努めようとする松井選手の生き方や言動の全てに「自尊心」の大切な要素があると生徒が感じることができた。	東京書籍 1年生
4－(4) 集団生活の向上	むかで競争	運動会という身近な内容なので、物語に入り込みやすい。主人公の気持ちについて考えていくことで、生徒同士、様々な考えを共有することができた。また、自分のクラスはどうであるか振り返ることで、生徒によってクラスに対する思いが様々であることを実感できた。	日本文教出版 1年生
1－(5) 向上心	じいちゃんへ	進路の選択が、いよいよ現実的な問題となっている中学三年生男子の主人公が、自分の祖父に対して人間的魅力を感じ、大工一筋に生きようと心を固めていく。主人公に視点を当てて考えることで、個性を伸ばして充実した生き方を求めることの大切さに気付かせることができた。	文部省道徳教育推進指導資料1 3年生

イ　効果的な発問の工夫

まず、中心発問がその時間のねらいとする道徳的価値と正対していることが大切であると考えた。さらに、「人の考えも聞いてみたい」「班で話し合いたい」と生徒の心が揺さぶられ、多様な考えが引き出される発問にすることを考え、発問構成を考えていくことが必要である。

また、一人一人の考えや気持ちを引き出せる発問に加え、話合いをより活発にするための効果的な発問として、生徒の実態と資料の特質を押さえながら、生徒が実際に体験した事柄やその体験を通して感じたこと、考えたことなどを引き出すことのできる発問を考えた。資料の内容により、ねらいとする道徳的価値からそれてしまうことがないような発問や時には補助発問を工夫することも必要であった。

具体的には、中心発問を含め三つ程度の発問に絞り、ねらいに迫ることができるようにした。中心発問は、主人公の葛藤場面におき、「あなたならどうしますか」というような自分に置き換えるような発問の仕方ではなく、登場人物の心情を追う形での発問を心がけた。自分のこととして考えると損得や周りを気にした意見になってしまいがちだが、登場人物の心情に自分を重ねることで多様な意見が出るようになった。

ウ　話合いの形態の工夫

資料の内容に応じて発問が異なるように、話合いの形態も固定化したり形式化したりすることなく、資料の内容や学級の生徒の実態等に応じて工夫することが大切であると考えた。しかし、中学校の発達段階では生徒は異性を意識する生徒も多く、話合いの難しさは様々な授業でも課題となっている。

生徒は、自分の意見を誰かに受け入れてもらうことで授業に参加した実感を強くもつことができる。そのため、まずは隣の席の生徒との意見交換（二人）、４人組での意見交換など、少人数で意見を出しやすい環境を作ることを心がけた。また、生活班（６人程度）の形にして、グループの中で自由に意見交換する時間を設けることで、多様な意見を出しやすくなり、自分自身の気持ちや意見を見直す場面も見られるようになった。

異性を意識する生徒も多く、話合いの難しさは様々な授業でも課題となっている。同性二人、男女二人、４人、６人、クラス半数、全員など、あらゆる形態が考えられるが、話し合うテーマや課題、題材などから適切な形態をつくり、話し合うことが望ましいと考えた。

少人数グループの話合いの形態として、二人組や４人組は、気軽に話ができ、意見交換することができる反面、内容を深めることや多様な意見を出すことが難しかった。また、発表の際にも、全ての意見を聞くことができなかった。６人組（生活班）は、多様な意見を共有することができ、発表の際も時間を短縮することができた。また、初めから班長がいて進行がスムーズであった。その反面、班員みんなの意見を聞いて、意見をまとめるための時間がかかってしまった。

二人から４人組へ、二人から６人組へ等と段階を追って形態を変えた話合いを行ったり、また６人組だけで話合いを行ったりするなど、各授業で活発な話合いができるような試行錯誤を重ねた。

(4)　授業改善の手だて「②心が通い合う工夫」

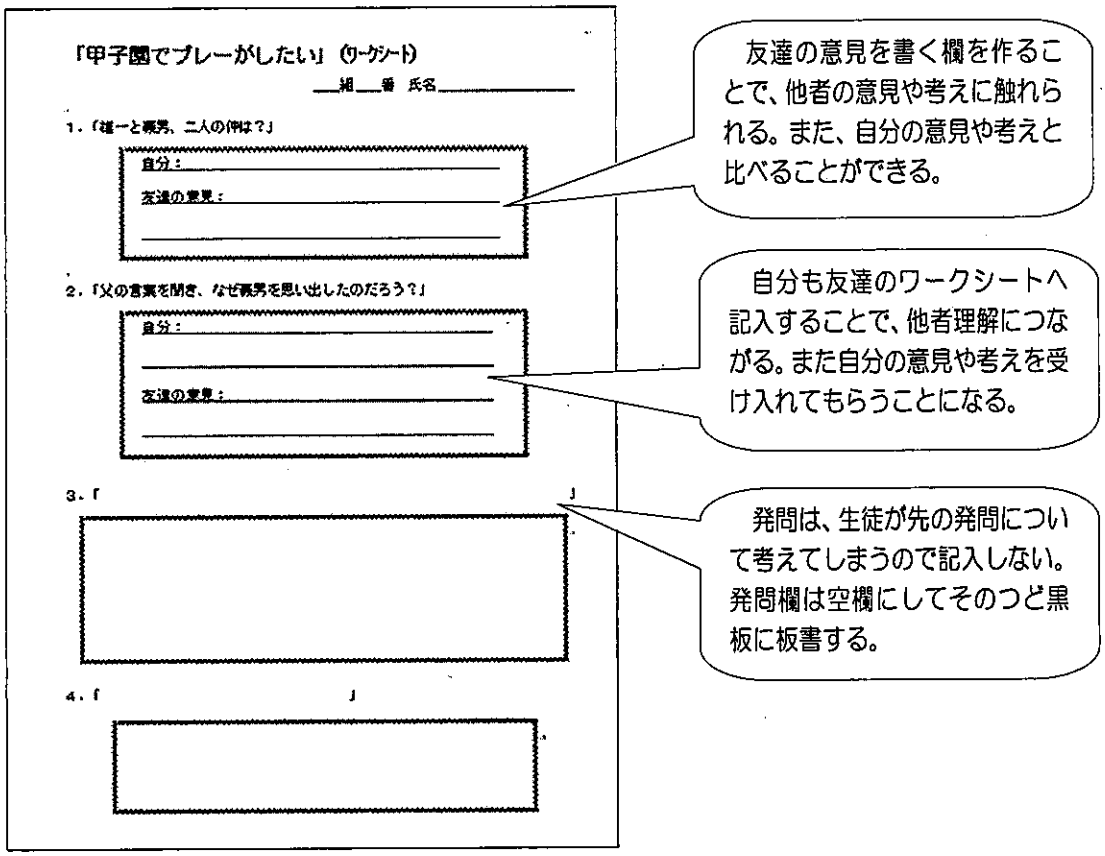
ア　ワークシートの工夫

> 生徒は書く活動を通して、自分のものの見方、考え方、感じ方などを確かめたり、まとめたり、記録に留めたりすることができ、それらを基に今までの自分のものの見方、考え方、感じ方を振り返ることもできる。
>
> （中学校学習指導要領解説道徳編 p. 101 より）

このように書く活動も言語活動の一つとして欠かせないものであるが、ワークシートは、話合いを補助するものとしても重要な役割がある。道徳授業でワークシートを活用することには、次のようなよさがあると考える。①生徒一人一人が自分の意見を書き、考えることができる。②自分の意見や思いを伝えるための手段の一つにもなる。③記入欄を工夫することで、他者のワークシートに自分の意見を記入し、自分と他者との意見を見比べることができる。④終末では資料の内容や、話合いの内容について振り返ることもできる。

本部会では、様々なワークシートを用意して話合いの補助として用いた。自分の意見を書く欄と他者の意見を書く欄を作ることや、他者の意見に対する感想を書く欄を作ることなどの工夫をした。

初めは自分の意見を書くことだけに集中していた生徒も他者の意見を聞き書き込むことや、他者の意見を聞いて感想を書くことを繰り返すことで、話合いが活発になった。また、ワークシートに発問が記載されていると次の発問や中心発問に対してすぐに自分の意見を書いてしまう生徒がいた。そこで、発問はワークシートに記載せず板書で提示したところ一つ一つの発問ごとに考えてさせることができた。



イ　学級通信の発行

道徳の時間に限らず、学年が上がるにつれて授業中の発言が減少していくことは大きな課題である。一方で、集めたワークシートを検証すると、ねらいに迫る記述や深く考えた文章が見られることも多い。授業時間内で教師がそれに気付き、発表させる機会をもたせることが一番の方法だが、授業展開などによりできない場合もある。そこで、授業終了後に回収したワークシートの記述を学級通信にまとめ、学級活動の時間などに読み合わせをするという方法をとった。

本部会の「自尊心を育む道徳の時間の指導の工夫」の観点から、通信において以下の点で工夫した。

(ア)　道徳資料のあらすじを載せる

通信は生徒だけでなく、学年、学校の職員、生徒の保護者、地域の方々の目に触れる。そ

こで話のあらすじを載せることで、資料がどういったねらいをもっているかを読み手に伝えるようにした。保護者の目に触れたとき、道徳の時間の内容が家庭でも話されるようにした。

(ｲ) クラス全員の意見を掲載する

特定の生徒の意見ばかりを掲載するのでは生徒には不公平感をもたせてしまうため、全員の意見が載るようにした。また、全員の分を掲載することが不可能な場合は、掲載生徒を名簿にチェックをし、掲載されていない生徒を把握し、次回の機会に掲載した。学級の生徒全員の意見が掲載されることで、全員が互いに認め合うことができると考えた。

(ｳ) 学級活動の時間などでの読み合わせを習慣付ける

その時の資料や生徒の意見の量によっても変わるが、基本としてＡ４用紙１枚での発行を心がけている。それは、読み合わせの時間をしっかりと取り、通信を読むことを習慣付けたいと考えたからである。年度当初からそうした学級の決まりをつくっていくと、生徒は自然と読むようになり、また互いの意見を尊重し合うようになってくる。

(ｴ) 道徳の時間の「ねらい」を深めるために、教師の説話や引用文を掲載する

生徒の意見だけはなく、教師の説話や引用文等を掲載することで価値項目に対する考えが深められるような通信の内容にしている。生徒にとっては、授業後にもう一度、資料内容やその時の自分の考えについて思い出し、さらに、他者の考えを通して自然とねらいとする価値について振り返り、深めることができる。

(ｵ) 道徳の時間の後に定期的な発行に努める

継続して発行することで、生徒のワークシートへの取組の意欲にも高まりが見られることから、道徳の時間の後に定期的に学級通信を発行している。

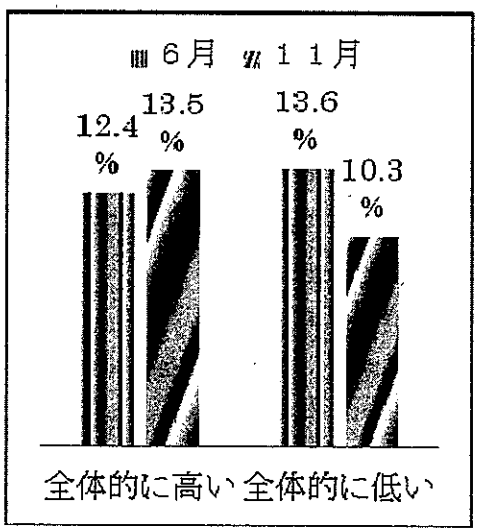
Ⅵ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 生徒の変容

4ページで述べた調査研究の11月の調査の結果、「自己評価・自己受容」、「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」の三つの観点が全体的に高い生徒は、12.4%から13.5%に上がり、6月の時と比べて、1.1ポイント向上している。また、全体的に低い生徒は13.6%から10.3%に下がり、6月の時と比べて3.3ポイント減少している（グラフ参照）。

これらのことから、それぞれの学校で、自分自身のことを否定的に捉えている生徒は確実に減ってきたことが分かる。



次に、各学校で変容した生徒の具体的な姿について紹介する。

①積極的に意見交換できるようになった生徒たち

Ａ校では、道徳の時間に必ず班での話合いを行っている。まず二人で考えを共有させ、次

に４人組での話合いへと広げたり、話合いの中で出てきた互いの考え方について「自分がどう思ったのか」を書かせたりという手だてを考えた。また、他者の考えを否定せず、一つ一つの考え方を大切にするように、繰り返し呼びかけを行ってきた。さらに、ワークシートに書かれた生徒の様々な考えを学級通信に載せ、他のグループの生徒の考えも共有できるようにした。

最初の頃は自分の考えを発表することにためらいをもつ生徒が多かったが、他者の多様な考えを読むことを通して「人によって様々な考え方がある」ということに気付き、自分自身の考えも積極的に発表する雰囲気が生まれてきた。

②他者の考えをしっかりと受け止めることができるようになった生徒

Ｂ校には、他者の考えを聞いても「自分と同じ考えだった」、「自分とは違う考えだった」という短い感想しか書けない生徒がいた。6 月の時点で、「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の三つの観点は共に低かったのだが、道徳の時間だけでなく普段の学校生活を通して、班での話合いの場を多く設けることにより、少しずつ話合いに対して前向きになってきた。10 月には、他者の考えを聞いて、共感した上で、より具体的な感想を書けるようにもなった。

例えば、資料「甲子園でプレーがしたい」（中学生の道徳『道しるべ２』　正進社）を使用して話合いを行った際には、ワークシートに以下のような感想を書いていた。

○発問

「『義男も一緒に行けるのですか』と聞いた時、雄一はどのような気持ちだったのだろう。」

○生徒１の考え

「あいつ（義男）もすごいし、一緒に行けるに違いない。」

◎生徒１の考えについての生徒４の感想

「確かにずっと一緒に野球をやってきて、お互いの実力を認めていると思うので、とてもいい考えだと思う。」

○生徒２の考え

「（義男も）一緒に行けるのかなあ、自分だけだったらどうしよう。」

◎生徒２の考えについての生徒４の感想

「一緒に行けるかという不安があると思った。その不安を捉えた気持ちになっていていいなぁと思った。」

○生徒３の考え

「確かにＲ高校にスカウトされたのはうれしいけれど、一緒に行けなかったらどうしよう。」

◎生徒３の考えについての生徒４の感想

「スカウトされたうれしさと、義男の気持ちを考えることも入っていてすごいと思った。」

他者の考え方をしっかりと受け止めることができるようになったこの生徒（生徒４）は、11 月の調査では「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」の三つの観点とも高くなり、確実に自尊心が育まれてきたことが明らかになった。

③日常生活の中でも「人のために役立とう」とする意欲が高まった生徒たち

C校では、生徒会役員選挙の際に、「役員をやってみたい」「学校のために働きたい」という声が自然と上がり、積極的に立候補する生徒がたくさん出るようになった。

このように各校では、学校生活の様々な場面で生徒の姿に変容が見られるようになった。生徒同士の「互いに認め合う」学習の重要性が分かった。

(2) 話合いの工夫

ア 読み物資料の精選

読み物資料は、生徒が道徳的な価値についての理解やその自覚を深めるために大変有効だった。そして、人間としての在り方や生き方などについて多様な感じ方をもち、考えを深め、互いに学び合う共通の素材として重要な役割をもっている資料について、どのように活用し、どのような資料が本部会として有効かを考えた。

資料を精選していく中では、更に資料の読み込みが必要であるということを感じた。また資料類型として、資料を①葛藤資料、②感動資料、③知見資料と大きく三つに分類した際に、本部会の仮説に基づき、有効な手だてとして多様な意見が出やすい①葛藤資料を活用することとした。実際の授業において、班での意見交換の場面では多様な意見が出て班の話合いが活性化したことから、適切な読み物資料選びは大変に重要であることが分かった。

イ 効果的な発問の工夫

葛藤資料においての中心発問では、「何を選ぶことが正しいか」という考えになりがちだが、そうではなく中心発問から様々な意見を出し、意見交換することから「よりよい生き方」や「望ましい行動」を考えさせた。そして、ねらいの根底にある道徳的価値を生徒が主体的に捉え、人間としての生き方の自覚を深めることが大切である。

実践の中では、中心発問で「異なる道徳的価値で葛藤する」とした場面があった。話合いが進む中で、ねらいとするところからそれてしまう班があったが、補助発問を用意したことにより、班の話合いがねらい迫るものに戻り、生徒の考えも更に深まりを見せた。

ウ 話合いの形態の工夫

「自分の意見を受け入れてもらえるだろうか」という不安をもったり、人前で話すことに慣れていなかったりすることで、なかなか自分の意見を発表することができない生徒もいる。しかし、隣の生徒との二人なら、又は少人数の中でなら恥ずかしさもなく自由に意見交換をすることができる場合が多い。４人組と６人組についても、それぞれメリットとデメリットがある。４人組については、考え方を聞くことのできる人数は少ないが、時間をかけずに自分以外の友達の意見を聞くことができる。一方、６人組は、数多くの多様な意見交換ができるという反面、話合いに時間がかかったり、時に参加しない生徒ができてしまうことがある。それらのことから本部会では、生徒同士が心を通わせる話合いの人数としては、４人程度の班が望ましいと考える。

(3) 心が通い合う工夫

ア ワークシートの工夫

教師にとって、授業中だけでは全ての生徒の思いや考え方を把握することは難しいが、ワークシートを活用することで確実に全ての生徒の意見を知ることができた。

班での意見交換の場面では、本人がワークシートに記入した後、そのワークシートに「意見交換の欄」や「友達の意見についてどう思うか」など他者から意見を書き入れてもらう欄を作り、ワークシートを班の中で回覧した。発表による意見交換も重要だが、ワークシートを活用した意見交換も「自分の意見を認めてもらえた」という気持ちになることが分かった。互いの心の通い合いのためには、ワークシートは有効な手だてであった。

イ　学級通信の発行

授業後の生徒の感想として「人から認められた」「みんなの意見を互いに尊重することができた」「自分の考え方が尊重された」という気持ちは大切である。しかし授業時間内では、全員が意見を発表して聞き合うということはなかなかできない。そこで、授業後に集めたワークシートから生徒の意見をまとめ、学級通信としてまとめた。発行後、自分の意見を改めて見たときの振り返りにもつながるが、「みんなが自分の意見を読んでくれている」ということが、更に大きな意味をもつことが分かった。

自分の意見をまとめられず、班での話合いも人任せになっていた生徒が、通信の発行を繰り返すことにより「自分も認められた」と感じ、ワークシートへ自分の考えを素直にまとめるようになったという事例もあった。

2　今後の課題

本部会では、研究主題「自尊心を育む道徳の時間の指導の工夫」をもとに目指す生徒像に向かって仮説を立て、授業改善に向けた研究を一年間行ってきた。

生徒同士が「互いに認め合う」学習を指導過程に位置付けるための手だてとして、話合いの工夫と心が通い合う工夫を取り入れた検証を行ってきたが、有効であった手だてと更に検証が必要な手だてがあった。

話合いの工夫では、特に資料精選において、自己の向上を図るという観点で内容項目との関連を考えた資料選択の視点が必要であった。効果的な発問については、主人公の心情を追うことを中心としたが、主人公だけではなく、「そこに関わる人たちはどう思っていたか」ということも考えさせることで、より深く主人公の心情に迫ることができると分かった。話合いについては、形態や人数の工夫に加えて、「展開のどの場面で行うのか」「どんな発問で行うのか」「話合いを行う前後の活動はどうするのか」等、まだまだ工夫していくべきことは多いことも分かった。

心が通い合う工夫については、自尊心を育む上では他者からの評価も大きいと考えた。そこで、ワークシートを工夫し、学級通信等を発行することにより班での話合いを活性化させ、他者の意見を尊重する学級の雰囲気をつくった。班での話合いも学級通信の発行も、大変有効な手だてであったが、学級通信の発行に関しては、あくまでも事後指導の要素が強いと考える。

本部会の目指す生徒像である「自己の向上を図る生徒・互いを認め合える生徒」については、道徳の時間だけではなく、各教科の学習を始めとする学校生活の全ての場面で、「生徒同士が互いに認め合える活動」を多く取り入れていくことが今後の課題として挙げられる。

生徒一人一人の自尊心を育む道徳の時間のために、今後も更に実践的な研究を重ねていきたい。

平成２３年度　教育研究員名簿

中　学　校　・　道　徳

地区	学　校　名	職名	氏名
大田区	志茂田中学校	主任教諭	岡　健一郎
荒川区	原中学校	主幹教諭	⊙大川　直樹
葛飾区	小松中学校	教諭	中村　和成
府中市	府中第五中学校	教諭	中里　和彦
東大和市	第一中学校	主任教諭	中野　たま美
羽村市	羽村第二中学校	教諭	小池　林太郎

○　世話人

［担 当］　東京都教職員研修センター研修部教育経営課
統括指導主事　表迫　信行

東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事　宮本　知司

平成23年度
教育研究員研究報告書

中学校　道徳

東京都教育委員会印刷物登録
平成２３年度第１８１号
平成２４年　３月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印 刷 会 社　有限会社　シーダー企画